

## 第2章 平和学の方法

岡本 三夫

### 1 はじめに

戦争を根絶することはできないかも知れないが、戦争の発生をミニマムに抑え、戦争による破壊と殺傷の規模を大幅に縮減することは理論的にも実践的にも可能である。各国はそのために競つて十全な平和学の研究体制を整え、そこに全力を傾注するべきではなかろうか。

もちろん、そこに即効性を求めるることはできない。しかし、一九一七年に起きたソ連での革命を皮切りに、暴力革命が多くの国で決行され、革命政権が君臨して世界の政治経済に影響を与えた二〇世紀の歴史を振り返つてみると、一方では一部の輝かしい成果に拍手を送りながら、他方ではさらに良いオルタナティブの追求が不足していたのではないかと考えざるをえない。平和学は具体的なオルタナティブそれ 자체ではないが、オルタナティブをめざす知的試みの一つとして位置づけることができる。では、平和学はどのような方法を用いることによつてそうした期待に応えようとするのだろうか。

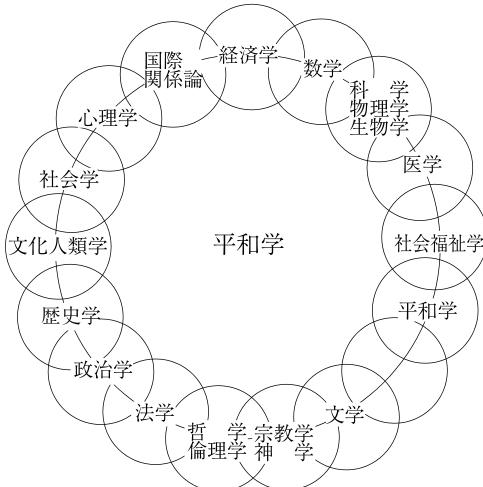
## 2 学際的アプローチ

平和学の方法の特徴はまずその学際性にある。学際的研究方法というのは専門的な個別的研究方法と異なり、専門分野間の緊密な有機的協力関係に基づく研究体制である。たとえば、環境汚染の実態を研究する場合、土壤や水質を研究する化学や物理学、汚染の地域性を調査する社会学、法律上の責任を研究する法学、生態系への影響を研究する環境学、健康被害を研究する医学、汚染患者

や患者の家族の心理を研究する心理学など、いろいろな専門分野の相互協力が必要だが、周知のことく、このような研究体制はもはや環境学や平和学に限られたことではなく、多くの分野の研究に採用されている。

図2-1は、カナダの平和研究者アラン・ニューカム博士とハナ・ニューカム博士夫妻が作った原型をモデルにしているので、「ニューカムの図」<sup>\*1</sup>と彼の名で呼んでいるが、いろいろな専門分野と平和学との関係を視覚的に表

図2-1 ニューカムの図



出所：Alan and Hanna Newcombe, *Peace Research Around the World*, Oakville, 1969 を基礎にしつつ、一部変更を加えたものである。

\*1 Alan and Hanna Newcombe, *Peace Research Around the World*, Oakville, 1969.

示した便宜的なもので、学際的研究では、このように、多くの専門分野が関係してくることを示している。小円で示した専門分野は一例としてあげたまでで自由な入れ替えが可能だが、何を平和学に期待するかによつても、国や時代や状況によつても違つてくる。小円の平和学は大学の専門あるいは通常の平和研究所における実態としての狭義の平和学を、大円の平和学は理念型としての広義の平和学を示す。

〈ニユーカムの図〉でわかるように、戦争の諸原因と平和の諸条件に関する科学的な研究のためには、あらゆる専門分野を動員し、国際的な協力を確保することが必要である。このような研究体制をつくるためには、大規模な研究所と莫大な費用が必要であり、国を超えるようなレベルの国際的なプロジェクトになる可能性もある。もちろん、ユネスコ、国連大学、国連訓練調査研究所（UNITAR）、国連平和大学（コスタリカ）などの国連諸機関は本来そうした目的のために設置された制度だから、学際的な平和研究機関のはずだが、資金難や人材難などのために残念ながら十分かつ有効な研究をしているとはいえない。

ストックホルム国際平和研究所（SIPRI<sup>ブリ</sup>）は平和研究所のモデル的な存在であり、毎年、『軍拡・軍縮S I P R I 年鑑』を出版するなど、学際的研究によつて大きな成果をあげている。スウェーデン国会直属の研究機関であるため財政基盤が確保されており、この平和研究所が軍事・兵器についての信頼度の高い情報を念入りに収集・整理して初めて一般の研究者にアクセス可能としたことの意義は計り知れない。これまで政府と軍の諜報機関が独占していた軍事・兵器についての機密情報が『軍拡・軍縮S I P R I 年鑑』の出版によつてガラス張りにされたからである。SIPRIは諜報活動はしておらず、独自の調査研究を行い、各国の防衛白書ほかの公刊された資料、断

片的なマスコミ情報などを収集・整理して体系化するという方法を採用しているという。『年鑑』は一般の研究者のためばかりでなく、政府間軍縮交渉のためにもほとんど不可欠の資料として役立つておらず、客観的に信頼できる資料としての評価が高い。そのほかにも、オスロ国際平和研究所（P R I O）、合衆国平和研究所（U S I P）などがあり、学際的研究による成果が期待されている。シプリが公刊された政府関係文書やマスコミ情報を収集・整理して体系化するという方法は、豊富な研究陣と情報網と学際的研究体制の成果であるが、同時に、ここから得られる教訓は、情報が氾濫している現代においては、断片的な情報だけでは無意味だが、コンピュータ解析を含む念入りな分析と検討を加えて体系化すれば機密性の高い情報に変質するという不思議である。そういう研究体制が敷かれていると、小出しに流出・漏洩している最高レベルの機密情報もすくい上げることができるという側面もある。

規模の小さい平和研究所や小人数のグループないし個人単位の平和学においては、学際的研究は困難だが、長年にわたって研究が継続され、その成果が蓄積されることによって、ある程度まで学際的研究に期待されている成果に匹敵する有効性が發揮できないわけではない。国際平和研究学会（I P R A）はその典型で、常設の二〇〇に近い研究グループの成果は個人と小グループによる研究だが、二年ごとに発行される『I P R A 平和研究紀要<sup>\*2</sup>』に蓄積された平和学の情報は研究者にとっての知的宝庫であるばかりでなく、平和を実現して行くための指針として有益である。

\* 2 *Proceedings of the  
IPRA*

### 3 システム論的アプローチ

平和学の方法の第二の特徴はシステム論的アプローチである。もし、これまでの古典的・伝統的な国際関係が弱肉強食をこととする戦争システムであつたとすれば、平和学は新しい平和システムとしての世界を構築することを研究する学問だということができる。平和学それ自体は、全く新しい学問だが、その母体となつたのは国際関係論、経済学、政治学、社会学、社会心理学、教育学、応用倫理学などの諸学だから、一方ではそれらの学問分野で発達した方法が部分的に適用されるのは当然である。同時に、戦争の諸原因や平和の諸条件は、非常に錯綜したレベルと局面をもつてゐるし、きわめて広範な領域にまたがつているから、諸現象をばらばらな個々の研究対象としてみるのではなく、本質的に相互連関をもつた<sup>ホメオティック</sup>なシステムとしてみななければならず、学際的・統合的なアプローチを必要とする。この点で古典的専門分科の原子論的アトミスティックで機械論的な世界観とはきわめて対照的である。

アーヴィン・ラスロは古典的・伝統的世界観とシステム論的世界観との相違をおよそ以下のように説明する。

デカルト的機械論を基礎におく近世以来の西洋的世界観では、自然是征服と制御の対象であつて、交換可能な部分からなる巨大な機械であり、人間の身体も修理と部品交換が可能な機械として理解される。精神と肉体は全く別個の機能をもつており、人間も動植物もそうだが、社会現象もいわば原子論的（アトミスティック）かつ個体的に取り扱われる。したがつて、物はその環境から独立した

個体として存在し、人間も他の人間と環境から独立した個体として存在する。物はすべて計測可能であり、経済成長はG.N.P.やG.D.P.によって計られ、経済的豊かさが進歩の指標となる。市場経済が人間性に最適のモデルとされ、個人なり企業なりの最大利潤を追求して行くなかに「神の見えざる手」が働いて社会的調和が保たれる（アダム・スミス）。資源やエネルギーは極限にまで利用され、工業化された西洋社会が進歩発展のモデルとなる。西洋中心主義・人間（＝男性）中心主義的なこの思想は権力欲と生存競争を生み、物質的な財の崇拜（物神崇拜）<sup>\*3</sup>が資本主義に内在する人間疎外となつて表出する。

これに反して、システム論的世界観では、人間は自然の一部とされ、人間と自然の間の緊密なつながりと調和的な相互依存関係は交換不可能な要素からなる有機的システムとしての自然を前提としており、自然も人間も予測不可能性な統一体として捉えられる。人間の身体も相互関係をもつた諸部分のシステムとしてみられ、精神と肉体は不可分である。このホリスティックな世界観では、社会的・経済的諸部分からなる全体は協力関係・相互関係にあり、柔軟性と適応性のある持続可能な発展が重視される。社会生活における生存競争的価値基準は協力的価値基準によつて置換され、アトミスティックで個人主義的な労働意欲は、人と人、人と自然の適応と調和を促進する制度と実践に基づく多元的な寛容性と実験によつて調整される。人類文化の多様性・多元性を受け入れ、それらを優劣のない、平等な価値をもつものとして認識し、持続可能性と成員の満足度のみを尺度にしてランクづける。この全体は惑星（地球）上の生命の脈絡・ウェブであり、前提条件である。<sup>\*3</sup>

物質的な財と権力欲ではなく、情報、教育、ヒューマン・サービスによる政治経済が再建される。

こうした世界認識の方法はすでにテオドア・アドルノを初めとするフランクフルト学派によつ

\*3 Ervin Laszlo, *The Systems View of the World: A Holistic Vision for Our Time*, 1996.

ても早くから提唱されており、部分的にはさまざまな領域に広く浸透して知的共有財となつてゐるが、このアプローチを駆使してグローバルな政治経済を体系的に分析したのがイマニュエル・ウォーラースティーンである（世界システム論の創始者とみられている。<sup>\*4</sup> ヘルシンキ大学教授（元・米ノートルダム大学国際平和学研究所長）のライモ・ヴァイリュネンはエリーズ・ボールディングと一緒くに書いた論文の中でガルトウング、アナトール・ラボポート、ケネス・ボールディングといった平和学の開拓者はすべてシステム論の立場から諸問題の分析を試みているといつてゐる。<sup>\*5</sup>

平和研究者としては第一世代に属するドイツのディーター・ゼンゲハースも、伝統的な近代化論が世界をさまざまな発展段階にある独立した国ぐにのばらばらな集合体としてみると対して、システム論では世界は相互依存関係あるいは支配と従属の関係にある単一のシステムとして認識される」とを前提としたうえで次のようにいつてゐる。

第三世界の低開発は、ヨーロッパ社会の工業化や近代化において支配的だったような自主的発展へ向かう過渡的段階にあるのではない。低開発は、むしろ資本主義の大都市の支配下にある国際社会の歴史過程に亘りての構成要素なのである。これらの大都市の発展と第三世界の低開発の歴史は国際経済システムによつて結ばれた相補的プロセスなのである。<sup>\*6</sup>

ゼンゲハースの指摘は近代化論とシステム論の相違を浮き彫りにした叙述として明快だが、世界システムが本質的には資本主義経済システムだということは、米ソ冷戦だけなわの時代において見え、驚くべきこと、国際貿易がドルやスターリング（ポンド）という西側の基軸通貨によつて決

\*4 Immanuel Wallerstein, *The Modern World System*, Academic Press, 1974.

\*5 Elise Boulding & Raino Vayrynen, "Peace Research. The Infant Discipline," in Rokkan, Stein (ed.), *A Quarter Century of International Social Science*, Concept Pub. Co., 1979.

\*6 "Conflict Formations in Contemporary International Society" in *Journal of Peace Research*, No. 3, 1973, p. 172.

濟されていたことにも象徴的に現れている。

戦争が起る原因を考えてみても、外交関係や政治的・軍事的な対立関係からのみでなく、経済的・社会心理的側面からのアプローチが必要であるし、さらに世界全体の軍事化現象も考慮に入れなければならない。戦争が新兵器を必要とするだけではなく、新兵器開発が戦争を誘発することもあるから、戦争と科学技術の相關関係は不可欠の研究分野である。イデオロギー、宗教、ナショナリズム、エスニシティ、あるいは戦争と父権制（家父長制）社会の関係、権威主義の役割、戦争と言語の結びつきといった観点からの研究にも注目する必要がある。大切なのは、こうした諸原因の複合関係の相互作用を「戦争システム」として把握し、「平和システム」との対比において概念化する新しい発想である。

一方では、世界全体の軍事化現象が進行し、資本主義市場経済が浸透するなかで、暴力がナショナリズムと結びついて冷戦終結後の世界は混沌としているが、他方では、米ロ間の軍縮が進み、国連を中心とした新しい国際秩序の創出、紛争の調停・解決などへの努力がみられ、非暴力主義や市民的防衛の新しい可能性が模索されている。ボーダーレスになった世界は、相互依存関係のなかで密接に関連した出来事の連鎖に満ちた生命のある有機的システムとして捉えることができる。ここに「戦争システム」から「平和システム」へとシステム全体を転換する契機がある。

それゆえ、反核平和、核実験禁止、軍縮、環境保全、飢餓解消、脱原発、民主化、人権擁護、フェミニズム、労働時間短縮などの要求は、別々の運動なのではなく、「戦争システム」に取つて代わるべき「平和システム」を構築するキャンペーンのさまざまな位相だという捉え方が求められる。その一つにかかわることは、「平和システム」の一環あるいは「変化要員（チエインジ・エー

ジエント)」として機能することを意味するから、そのどれか一つにかかると、まるで芋づるのようく他との関係が生じてきて、生活スタイルまでが変わってくることが多い。こうしたキャンペーンにかかる人びとの多くがフェミニストであり、菜食主義者であることは決して偶然ではない。

環境問題はシステム論的アプローチのよい例で、「森林の消滅、オゾン層の浸食、食物の毒物汚染連鎖、河川の水銀汚染、大気中の鉛、無機質の土壌、農地や平原の砂漠化などは、それ自体が深刻な問題だが、同時に、こうした問題を引き起こした経済的、政治的、科学技術的、文化的、哲学的体制が問われている」といわれるよう、自然の荒廃を無視してきた産業開発のスタイルは「戦争システム」を支えてきた体制と表裏一体であることがわかる。自然資源の争奪は環境破壊をもたらし、世界市場の争奪は戦争をもたらした。冷戦時代の際限なき核兵器開発競争が「地球の運命」を左右するものとして終末論的に知覚されたのも、「戦争システム」の行き着く先が明白だつたらにはかならない。

ロバート・アーウィンは、核時代の「際立った特徴はおそらく核爆弾ではなく、市民大量虐殺の容認であり、そうした虐殺準備の容認である」として、こうした態度を「ヒトラー主義」と呼んでいる。<sup>\*7</sup> ヒトラー個人は敗北したが、「ヒトラー主義」は勝利し、地球上の全人類を人質にした核抑止論として生き残った。米ソ核戦争のシナリオ・ライター達は「メガデス」(百万人死)という単位で戦略論を立案し、億単位の殺人計画をしていたのだから、「ヒトラー主義」の帰結には戦慄せざるをえない。

ドワイト・マクドナルドという米国人も第二次世界大戦終結直後に『政治』<sup>\*8</sup> という月刊誌で、「都市を実験室に、市民をモルモットにした広島・長崎への原爆投下によつて、米国は第二次世界

\*7 Robert Irwin, *Building a Peace System*, 1989.

\*8 Politics, 一九四五年九月号。

大戦を正義の戦争だったと主張する資格を失い、ヒトラーと同じレベルにまで墮落した」と喝破している。大量虐殺の容認という点では、日本軍による南京大虐殺や重慶爆撃も「ヒトラー主義」と共通するものだった。

日本のプルトニウム大量輸送についても、原子力発電所についても共にいえることは、「過酷事故の際の大量死」を容認しているという点で、「ヒトラー主義」と同根ではなかろうか。英国の「核廃絶運動」(CND) やドイツの「みどりの党」をはじめ、「欧州核廃絶運動」(END)、環境保護団体の「グリーンピース」などが、米ソの核軍拡競争、戦略防衛構想(SDI)、プルトニウム利用などの人類史的危険に敢然として立ち向かったのは、それらが「大量虐殺準備」にはかならず、「ヒトラー主義」の延長線上にあるということを直観的に把握したからだつた。ごく最近の欧米諸国の中でも、「核兵器は一般的には国際法違反」であるとした国際司法裁判所の勧告的意見が発表されて以来（一九九六年七月）、核兵器を世界各地に配備しているのはいわば「凶器準備集合罪」に相当するという認識のもとに市民兵器検査団が登場し、活発な活躍をしている。英国のアンジー・ゼルターら三人の女性が核兵器搭載艦に忍び込んで核兵器使用に必要なコンピュータを破壊したが、無罪となつた事件は有名である。

平和学の方法は、以上のようなシステム論的世界観と思考スタイルの普及に依存しているから、従来の学問の思考習慣となつてゐる垂直的で、ピラミッド型の、専門分割的な学問觀とはラディカルに違う。ジョアナ・メイシーは、この新しい方法を「現代における主要な認識論上の革命」(the major cognitive revolution of our time) <sup>\*9</sup>と特徴づけてゐるほどである。<sup>10</sup>)のように、平和学には科学理論それ自体を批判的に考察する側面があり、科学史や哲学的・倫理学的な研究が求められている

\*9 Joanna Macy's "Forward" in George Lakoff, *Powerful Peace-making*, 1987.

が、平和学の制度化が著しく立ち遅れている日本では、これまで等閑に付されてきた分野だった。しかし、加藤尚武編『応用倫理学事典』（丸善出版、二〇〇八年）の出版によって哲学・倫理学の分野から平和学に接近する画期的視点が初めて提示されており（同書「11・平和・国際関係の倫理」参考照）、今後の展開が期待される。

#### 4 「人間は考える〈足〉である」——エクスボージャーとしての平和学

平和学の方法の第三の特徴はエクスボージャーである。平和学では「足で考える」、ないしは「足の裏で学ぶ」要素、つまり現場主義を重視する。〈考える葦〉ではなく〈考える足たれ！〉というわけだ。書物や論文を読み、講義を聞き、ゼミでの討論に参加するのはもちろん重要である。が、同時に、現場へ行って〈五感で学ぶ〉ことが強調される。現場は学内、町内、市内、県内、国内外など、いたるところにある。要するに〈現場で〉あるいは〈現場から〉学ぶという姿勢だといつてよい。記者や検査官が現場を重視するのと同じである。学生の場合、実りある現場研修のための周到な準備と研修後との的確な評価は不可欠で、リポートあるいは報告書の作成が義務づけられる。

平和学における現場主義が重要なのは、大学で学んだ理論を単なる机上の空論に終わらせないためばかりでなく、①知識が体験によって裏打ちされること、②全体の中での知識の位置が確認され、他の諸問題と関係づけられること、その結果、③知識に方向性が与えられることによって、より深い、有効な知識となることをめざしているからである。限りなく理論と実践の統一を求める平和学の方法論がここにある。

このような平和学の実践的方法論の一つとして採用されているのが「エクスボージャー」と呼ばれる現場研修である。このexposureという言葉は「露出する」「人目にさらす」などを意味する動詞(expose)からきた語で、恥をさらすことも、放射線の危険に身をさらすこともエクスボージャーだが、この方法による学習は、いわゆる「社会調査」とは発想が逆転している。社会調査では、研究者なり調査員なりが調査の主体であり、調査の相手は客体として研究者なり調査員なりの目にさらされる。いつてみれば、研究者はあたかも検察官の態度で相手を〈取り調べる〉わけで、調査対象を研究者の分類法、整理法、理論的枠組みに合わせようとする。<sup>\*10</sup>

エクスボージャーの基本は、ある状況の中へ身をさらし、相手の世界観の中へ自分をさらけ出すことによって、状況から学び、相手から教えられることにある。この方法は文化人類学などの領域で優れた業績を残した研究者の間で採用されているものだが、平和学における現場研修を貫く学習態度でなければならない。この認識方法においてはカントの認識論に見られるような「主体↓客体」という一方的な関係(モノログ)は消え去り、両者が共に主体として教え合い、学び合う「主体↑客体」という双方向的な関係が成立する(ダイアログ)。エクスボージャーは自分をさらけ出す、エクスボーズすることなのだが、その結果、相手もまた本当の自分をさらけ出し、エクスボーズしてくれるという相互関係でもあり、ここに本当の信頼関係が生まれる。教えるのではなく教わり、何かを説くのではなく、聴き耳を立て、相手の話に引きずり込まれることを恐れない。弱み(vulnerability)があつてもいい、いやあつたほうがいい。この方法は、結果的には、深いレベルで相互に教え、影響し合うことになる。

こうした関係の作り方は一般的な言い方としては男性的というよりは女性的だといえるかもしれない

\*10 このような客観的研究方法の認識論については I・カント著／篠田英雄訳の『純粹理性批判 上』(岩波書店、一九六一年)の序文参照。

ない。フェミニスト的価値観が平和的だといわれる理由もエクスボージャーにみられるような対人関係や認識方法が女性の間ではある程度まで〈歴史的に定着している〉からだろう。また、男性と違い女性はホリステイックであらざるをえない。フルタイムの仕事に就いている母親の場合は特にそうである。買物、炊事、掃除、洗濯、子育て、ゴミ処理、家計、近所隣りとの付き合いなど、全人的な活動を要求される。職場での仕事だけに専念していればいい大半の男性とは〈異質〉の人間である。

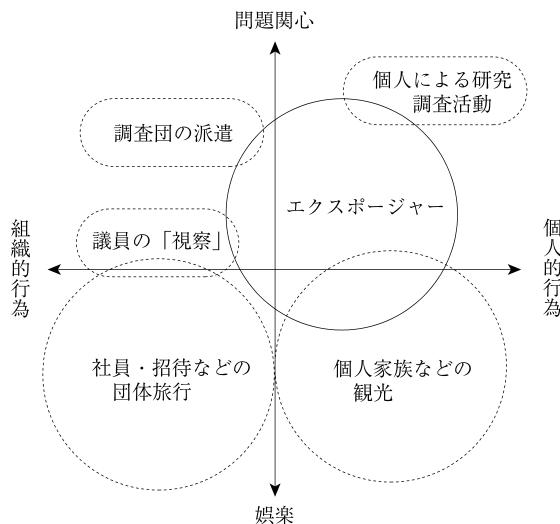
長年、エクスボージャーによる国際平和学現場研修という授業に取り組んできているフェリス女学院大学教授の横山正樹は次のように言っている。エクスボージャーとは

身も心も丸ごと別の地の人びとの生の状況に触れるような旅の仕方をいう。観光が傍観者的な行為であるとしたら、エクスボージャーはもつと自己投入的である。冷房の効いたオフィスでのブリーフィングとデラックスな観光バスの窓越しの觀察ではない。本や講義で学んだ方法論にもとづいて対象地域に踏み込む従来型の社会調査でもない。グループで参加してもウエイトはまず個人におかれる。これまで自分のまどってきた殻をなるたけ脱ぎ捨て、自分が変わり、出会った人びとの関係をそこから洗い直し、自分たちを全体として包み込んでいる構造的暴力を克服していくとする共同の奮為の第一歩がエクスボージャーなのである。

そして横山はエクスボージャーをその他の調査や旅行・訪問などと区別して理解し、整理することができるように図解している。<sup>\*11</sup> エクスボージャー・プログラムは馴れ親しんだ環境を一時的に離れて、今までとは異質の環境や

\*11 横山正樹「第三世界と先進工業諸国にわたる市民連帯は可能か」久保田順編著『市民連帯論としての第三世界』（文眞堂、一九九三年）。

図2-2 各種の旅行におけるエクスポージャーの位置と相互連関



出所：横山正樹「第三世界と先進工業・諸国にわたる市民連帯は可能か」

久保田順編著『市民連帯論としての第三世界』(文眞堂, 1993年)。

異文化のなかに自分をさらけ出すことだから、そのためには、①「教室・キャンパスから出る」、②「地域から出る」、③「国から出る」ことが前提となる。一時的には「自分から出る」ことも経験するといい。

外国には、一定の期間、「教室・キャンパスから出る」ことを義務づけている平和学部もある。

英国のブランドフォード大学平和学部では「三年次は大学外で適当な臨時職につくものとする」と規定しており、「平和学と関連あり」と

と判断される有給・無給の仕事に従事することが義務づけられている。日本の大学でも行われるようになつた「インターナンシップ」である。受け入れ先是難民収容所、障害者福祉施設、保育所、学校、老人ホーム、病院などをはじめ、弁護士事務所、平和研究所、平和教育研究所などである。国連研修所(UNITAR)、国連食糧農業機構(FAO)、国際奉仕団(IVS)など、

国際機関がある都市の大学ならば、このような制度は大学のPRにもなるだろう。

「地域から出る」ことによつてみえてくる現実もある。同じ被爆都市であつても、中国地方にあつて、百万人以上の人口を擁する政令都市広島と九州の中都市長崎とでは、被爆者の意識も市民感情も平和運動も相当違つてゐる。この相違は両市の「平和宣言」を比べてみてもはつきりしている。現在では、広島は「中心」の発想に近く、長崎は「周辺」の発想と似ている。市長の個性によるが、前者が「お墨付きの平和運動的」宣言になり、後者が鋭角的な宣言になりがちなのはそのためである。水俣病で世界的に有名な水俣湾、大阪の日雇い労働者の「寄せ場」である釜ヶ崎、フィリピン人「花嫁」が嫁いでいることで知られる徳島県の東祖谷山村、公害の原点といわれる栃木県の足尾銅山跡地、原子力発電所のある都市等を訪問して、土地の人びとに接し、状況の中へ身を沈ませることによって、はじめてみえてくる現実は「万巻の書」を読むことにも匹敵する。

「国から出る」ことによるエクスボージャー・プログラムの効果は計り知れない。外国旅行はもはや珍しいことではないが、どのような意図と構想のもとに旅行するかによつて、外国での体験も非常に違つてくる。もちろん、ゼミ旅行や卒業旅行で外国を訪れ、異文化体験をするだけでも、「国から出る」ことの意義はある。しかし、こうした旅行で、高いホテルに宿泊し、観光地を訪れ、観光客用のレストランで食事をし、土産を買つてくるだけでは、平和学におけるエクスボージャーで期待されているような異文化学習効果は得られない。在欧三十数年と外国暮らしの長い犬養道子さんは「日本滞在は三か月が限度。日本にいると世界で何が起きているのかわからない」（朝日新聞、一九九三年一月三日「ひと」欄）といつてゐるが、島国という制約をもつた日本には現在でもそういう面があるのは否定できない。確かに、国際化も進み、海外渡航者数は年間一〇〇〇万人以上にのぼる。しかし、その大多数は「カプセル旅行」、「潜水艦旅行」を決めこんだ「鎖国派」で、エクス

ボージャーとは最もかけ離れており、渡航前の偏見やパンフレット情報とは異質のオリジナルな体験はしてこない。外国旅行がかえって「偏見の強化」となる場合も多い。本来の現地人と付き合いのない「カプセル赴任」の商社員や特派員でさえそうだ。極端な場合は、付き合いは日本人の仲間内だけ、新聞も雑誌も日本語、子供は日本人学校へ通わせ、日本のビデオ・テレビを見、日本食を食べ、娯楽はゴルフと麻雀とカラオケ。そして、「やっぱり日本が一番いい」となる。外国旅行や外国赴任が全く活かされてない。

これに反し、エクスボージャーによる異文化学習の実践に挑んでいる若者も少しづつ増えている。ホテルには泊らず、根気よく、安くて清潔なベンションや寮を探す。民泊を試みる。タクシーや外国人用のレストランは避け、現地人と同じ乗り物を利用し、同じ物を食う。現地人の感覚で現地の通貨を使う。換金レートは忘れたほうがいい。できるだけ歩き、草木や土の香り、生活の臭い、人々の息遣いにじかに触れる。思わず出会いへの期待と開いた心は人間を豊かにする。エクスボージャー方式の旅行や生活のスタイルは現地人の評判もいい。もちろん、片言以上の語学能力が必要なことはいうまでもない。

私が一九八九年にフィリピンのネグロス島で横山正樹らと一緒に行つたエクスボージャー・プログラムで、体験し、考えたことを具体例として紹介しておきたい。約一〇名の学生と一緒に不グリトという少数のエスニック集団の集落を訪問し、彼女ら・彼らの生活実態について学習したのだが、同島のドゥマゲティ市にあるスイリマン大学のフロンティア・プロジェクト・チームが協力してくれた。

ネグリトは固有の言葉を話し、公用語のタガログ語もこの地方の共通語のセブアノ語<sup>12</sup>も解しない。

\*12 (Sebuano) フィリピンで広く用いられている共通語。公用語であるフィリピノ語(タガログ語)よりも使用者が多く、フィリピン最大の言語(広辞苑)。「第五版」岩波書店。

むろん英語は聞いたことさえない。伝統的には狩猟と採集が彼女ら・彼らの生活様式だが、最近では簡単な農耕や家畜・家禽の飼育もするようになった。セブアノ人をはじめ、外来者を恐れて、接触を忌避してきたのだが、スイリマン大学プロジェクト・ティームの長年にわたる努力の結果、信頼醸成に成功し、「文明人の中にも信頼できる人間がいる」のだということをやつと知らせることができたという。

「文明人の中にも信頼できる人間がいる」という話はショックだった。かつて、ソロモン群島のある島で現地人と車に同乗した作家の小田実は、「銃を持った現地人の大男が、どうして無防備な文明人である私をあんなに恐れ、気味悪がって、ビクビクしていたのか、最初は見当もつかなかつた」と私に語つことがあるが、ネグリトも「文明人」を恐れていた。ソロモン群島の場合は太平洋戦争中における日本軍の行動と無関係とは思えないが、いわゆる「未開人」が「文明人」を恐れる理由は十分ある。「文明人」を信頼したために滅ぼされてしまった中南米のインカ族やアステカ族をはじめ、征服され、植民地化されてしまった大陸、国、民族、エスニック集団は少なくない。「未開人」も虐殺はするだろうが、「文明人」がするような大規模の虐殺はしない。ヨーロッパという限られた地域に閉じ込められていた「歐州族」がアフリカをはじめ、北米、中南米、豪州、ニュージーランド、ハワイほかの太平洋諸島、シベリア、南アと、世界の隅々にまで住み着くようになった背景には、彼らが発明した銃砲の威力があつたのは確かだが、同時に「未開人」の無防備で平和な生活スタイルがあった。白人が大航海に乗り出し、「未開人」と接触したとき、ほとんどの場合、「未開人」は笛や太鼓や踊りで白人を歓迎したという事実を指摘しながら、人類学者のアシュリー・モンターギュは「人間は生来攻撃的である」という命題を批判しているが、「未開人」

とは対照的に白人の攻撃性と征服欲は凄まじかつた。<sup>\*13</sup>ストークリー・カーマイケルも「白人がアフリカにやつてきたとき、彼らは聖書を、アフリカ人は土地を持っていた。今では、彼らは土地を、アフリカ人は聖書を持っている」といって、「キリスト教文明国」の強引な植民地政策を痛烈に批判している。

ネグリトの集落には電気も、ガソリンも、水道も、井戸もなく、彼らの生活は新石器時代以来ほとんど変化していない。文明人は遙か昔にこうした未開社会と訣別して都市を作り、生活様式を改善し、科学技術を発達させて、現在の文明と文化を築き上げたのだが、それは戦争と暴力と征服に満ちた歴史だった。かつてのハリウッドで作られた西部劇では、アメリカ大陸の先住民たちは、きまつて残酷な加害者、好戦的な野蛮人として描かれ、その反対に、侵入者の白人は被害者、法と秩序を重んじる人道的な文明人として描写されていたし、こうした人種的偏見に異議を唱える映画評論家もいなかつた。未開人が文明人を組織的に抹殺したという事例はない。未開人が文明人を攻撃したり、殺したりするのは、大抵の場合 文明人の侵略に対する自衛的な反撃としてであり、それも小規模なものである。文明の進歩と共に、破壊手段も迅速かつ巨大になつたわけだが、ネグリトの生活様式へのエクスボージャーはこの流れを逆流させないと、人類に未来はないのだということを教えてくれ、文明人の思い上がりを正し、「文明病」を癒してくれる良薬のような気がしてならなかつた。

\*13 Ashley Montagu, *The Nature of Human Aggression*, 1976. 邦訳は尾本恵市・福井伸子訳『暴力の起源』(どうぶつの社、一九八二年)。

\*14 Stokely Carmichael (1941-1998) トリニダド生まれ。『ニューヨークのハーレムで育ち、「ブラックパワー」を唱えて六〇年代における黒人運動の指導者となる。白人の安易な同情はいらぬとして非妥協的・戦闘的な思想と実践を展開した。